

## 公開フォーラム

### 世界文化遺産「ナスカの地上絵」の研究と保護をめぐる国際協力

中川渚（総合研究大学院大学）

2015年3月19日（木）、国立民族学博物館第4セミナー室にて、公開フォーラム『世界文化遺産「ナスカの地上絵」の研究と保護をめぐる国際協力』が開催された。主催は国立民族学博物館 科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（研究代表者：関雄二）、および山形大学人文学部 新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」計画研究 A03「アンデス比較文明論」（研究代表者：坂井正人）、そして古代アメリカ学会および文化遺産国際協力コンソーシアムの協力のもと、国際交流基金の助成を受けたものであった。連日続く雨の中ではあったが、31人が会場に足を運んだ。

本フォーラムは、ユネスコの世界遺産のうち最も有名なもののひとつであり、また最近破壊や保存に関してメディアにも取り上げられることの多い、ナスカの地上絵の研究と保護に関するものであった。はじめに国立民族学博物館の関雄二氏より開催の趣旨が述べられ、次に山形大学の坂井正人氏、ペルー国立ビジャレアル大学のミゲル・パソス氏による講演があり、最後に関雄二氏の司会のもと質疑応答が行われた。

坂井正人氏は「世界遺産ナスカの地上絵に関する学術研究と保護活動」のタイトルで、ナスカの地上絵の発見と研究の歴史を詳しく紹介し、その後、現在山形大学によって行われている研究と保護について述べた。山形大学は2004年からナスカの調査を行っており、衛星写真と踏査から多くの新しい地上絵を発見している。講演では、地上絵は地上から全体像が見えにくいために破壊が進みやすく、まずは測量をして図化することで、どこに何があるかという情報を広く共有することが、地上絵の保護に重要であることが示された。また、山形大学による遺物を含めた分析から、地上絵の描かれた時期やそれに関連する儀礼についての興味深い成果が提示された。

次に、ナスカを含むイカ県の文化財保護に長年にわたって携わってきたミゲル・パソス氏は、「ナスカの学術調査と文化遺産保護」のタイトルのもと、ペルーの政治的背景や文化財保護機関の設置の歴史、そして自身の経験を絡めながら、地上絵の保存の歴史を年代順に丁寧に講じた。この中で、何度か旧文化庁やユネスコなどによる保護計画が作成されながらも、資金不足などの問題によりほとんど実行されずに破棄されてきたことも示された。実現に至るまでに多くの課題があるのだろうが、少なくともこういった数度にわたる計画策定から保護意識が一層高められてきたように感じた。しかし、近年鉱山開発や宅地造成によって急速に地上絵の破壊が進んでおり、早急に対策をとる必要に迫られている。2013年より新しく運営計画が練り上げられているとのことで、この計画の実現を期待したい。

質疑応答では、司会の関雄二氏よりいくつか質問がされたほか、予定時間を過ぎても会場から質問や意見が出され、盛況のうちに終了した。



写真提供：科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」プロジェクト

主催：国立民族学博物館

科学研究費補助金基盤研究（S）

「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（研究代表者：関雄二）

共催：山形大学人文学部

新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」計画研究 A03

「アンデス比較文明論」（研究代表者：坂井正人）

協力：古代アメリカ学会 文化遺産国際協力コンソーシアム

助成：国際交流基金